292

44所修正

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第12集

周防畑遺跡群

WAKA MIYA

若宮遺跡 II

長野県佐久市長土呂若宮遺跡II発掘調査報告書

2.3

1991

1992.3

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第12集

周防畑遺跡群

WAKA MIYA

若宮遺跡 II

長野県佐久市長土呂若宮遺跡II発掘調査報告書

1991

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は、有限会社山浦土木による資材置場進入路建設に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　調査委託者　　有限会社　山浦土木

3　調査受託者　　佐久市教育委員会

4　発掘調査所在地籍

　周防畑遺跡群　若宮遺跡II（NWA II）

　佐久市大字長土呂字若宮　1204-4,1205-2,1163-45

5　調査期間及び面積

　平成3年9月4日～平成4年3月31日

　面積　138㎡

6　本書の編集及び執筆は、三石が行った。また、第II章遺跡の環境については、佐久市教育委員会『若宮遺跡』「II遺跡の位置と環境　1若宮遺跡付近の自然環境」の内容を一部引用して掲載した。

7　本書及び出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査に際して、有限会社山浦土木をはじめ、地元の方々には、発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただきました。記して感謝の意を表します。

本 文 目 次

例　言
第Ⅰ章　発掘調査の経緯 ……1
　第1節　調査の経緯と経過 ……1
　第2節　調査体制 ……2
　第3節　調査日誌 ……2
第Ⅱ章　遺跡の環境 ……3
第Ⅲ章　基本層序 ……5
第Ⅳ章　遺構と遺物 ……7
　第1節　竪穴住居址 ……7
　　1）第1号住居址 ……7
　第2節　土　坑 ……11
　　1）第1号土坑 ……11
　　2）第2号土坑 ……12
　第3節　ピット群 ……13
第Ⅴ章　調査のまとめ ……14
引用参考文献

挿 図 目 次

第1図　若宮遺跡Ⅱの位置 ……1
第2図　周辺遺跡分布図 ……3
第3図　基本層序模式図 ……5
第4図　若宮遺跡Ⅰ・Ⅱ遺構全体図 ……6
第5図　第1号住居址実測図 ……7
第6図　第1号住居址出土土器実測図 ……9
第7図　第1号住居址出土鉄製品実測図 ……9
第8図　第1号土坑実測図 ……11
第9図　第1号土坑出土土器実測図 ……11
第10図　第1号土坑出土石器実測図 ……11
第11図　第2号土坑実測図 ……12
第12図　ピット群実測図 ……13

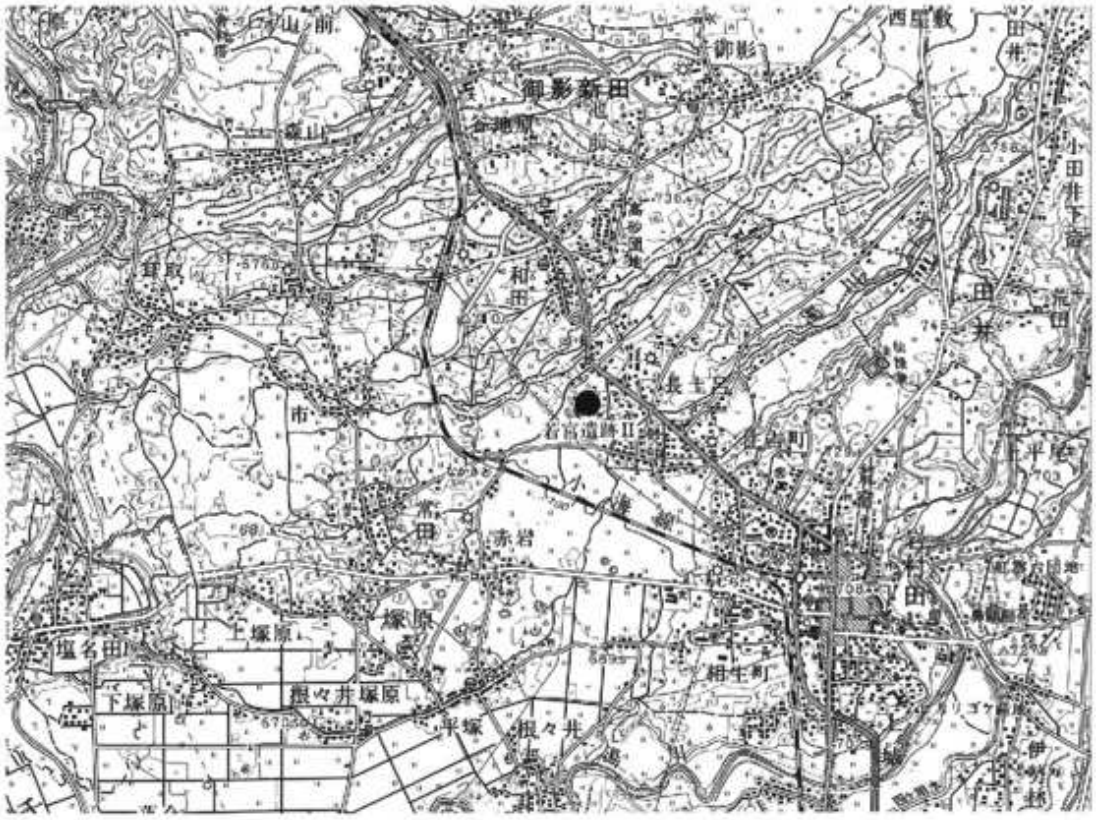
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査の経緯と経過

若宮遺跡Ⅱは、佐久市大字長土呂に展開する周防畑遺跡群の南側に位置し、標高は713m前後を測る。同遺跡群内では、周防畑Ａ遺跡、周防畑Ｂ遺跡、若宮遺跡Ⅰ等の発掘調査が行われている。

本遺跡の西側に隣接する若宮遺跡Ⅰは、昭和58年度に発掘調査が実施され、古墳時代後期から平安時代の竪穴住居址が16棟検出された。

今回、有限会社山浦土木が資材置場進入路を建設することになったため、第１次調査を実施して遺構の確認を行った。その結果、竪穴住居址１棟他が検出されたため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。



第１図　若宮遺跡Ⅱの位置（1：50000）

第2節　調査体制

事務局　佐久市教育委員会埋蔵文化財課・佐久埋蔵文化財調査センター

教育長　大井　季夫

教育次長　奥原　秀雄

開発公社事務局長　佐々木正泰

埋蔵文化財課課長・佐久埋蔵文化財調査センター所長　上原　正秀

管理係長　桜井　牧子

埋蔵文化財係長　草間　芳行

埋蔵文化財係　高村　博文・林　幸彦・三石　宗一・須藤　隆司・小林　真寿・羽毛田卓也・竹原　学

調査団

調査団長　黒岩　忠男

調査副団長　藤沢　平治

調査担当者　三石　宗一

調査員　和久井義雄・宮川百合子・金森　治代・渡辺久美子・篠原　昭子・東城　友子・角田すづ子・角田トミエ

第3節　調査日誌

平成3年9月27日

有限会社山浦土木、佐久市教育委員会埋蔵文化財課とで、現地にて協議を行い、重機により表土削平作業を行う。

9月4日

検出作業を行い、住居址1棟、土坑2基を検出する。

9月5・6日

検出された各遺構の掘り下げ、実測図作成、写真撮影を行う。

9月7日

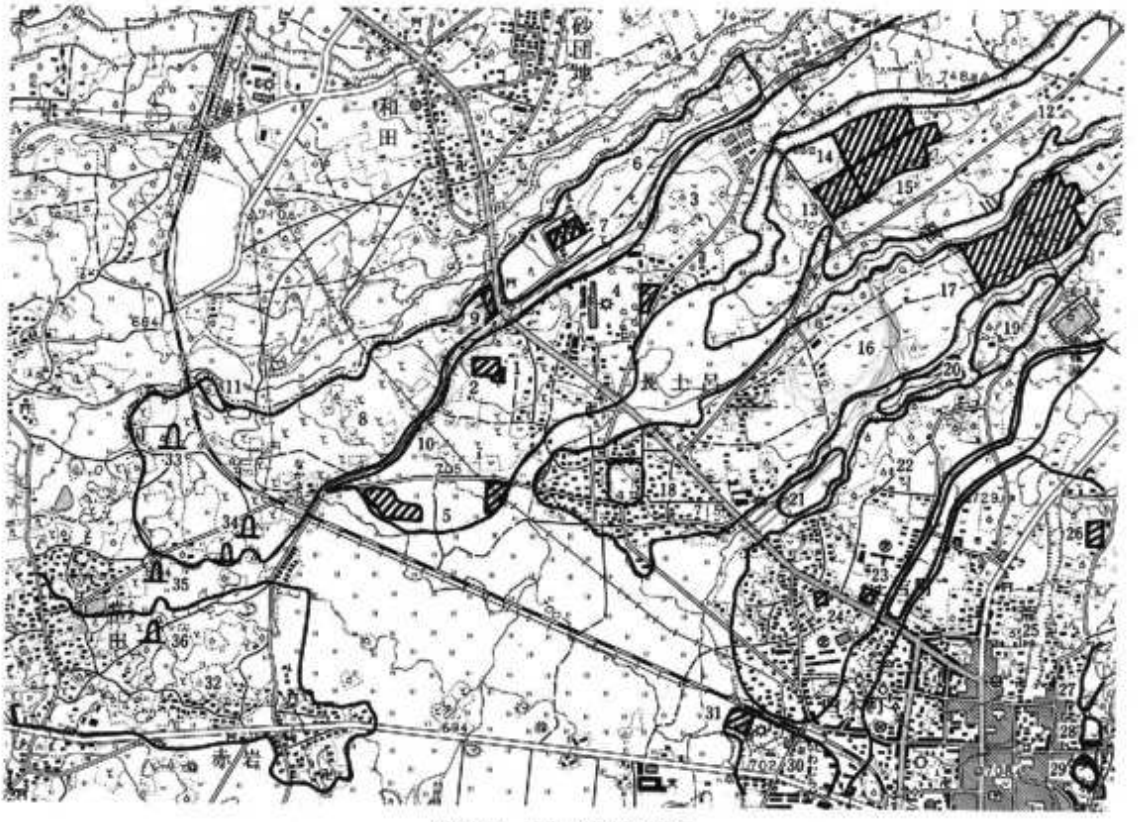
実測図作成、写真撮影、機材の撤収を行い、現地調査を終了する。

平成4年2月1日～3月

遺物整理・報告書作成作業。

第II章　遺跡の環境

周防畑遺跡群若宮遺跡IIは、佐久市の最西北端、佐久市大字長土呂字若宮地籍に所在し、標高は713m前後を測る。若宮遺跡付近の地形地質を考察すると、佐久市中込原以北の佐久平は浅間火山の噴出物の堆積地帯であると言い得る。浅間山は、標高1000m以上の山腹は傾斜が急で人類居住には適していないが、それ以下は傾斜が緩やかで耕地や村落が拓け、南方標高700m内外の佐久平まで平坦地が続いている。この浅間山腹に水源を持つ蛇堀川・濁川・湯川は何れも南流して、佐久平の北半を灌漑して千曲川に流入している。ところが、これらの川の流域はすべて浅間火山の新しい噴出堆積による泥流・火山砂礫・火山灰・浮石の分布地帯で、流水浸蝕に頗る弱いため火山裾野特有な“田切り地形”が見事に発達している。この田切りの周辺には多くの遺跡が分布しており、若宮遺跡もその一つである。本遺跡群内での発掘調査は、昭和54年度に周防畑A遺跡、昭和55年度に周防畑B遺跡の発掘調査が実施され、周防畑A遺跡からは、奈良時代の住居址1棟、平安時代の住居址4棟、周防畑B遺跡からは、弥生時代後期の住居址23棟・円形周溝墓



第2図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

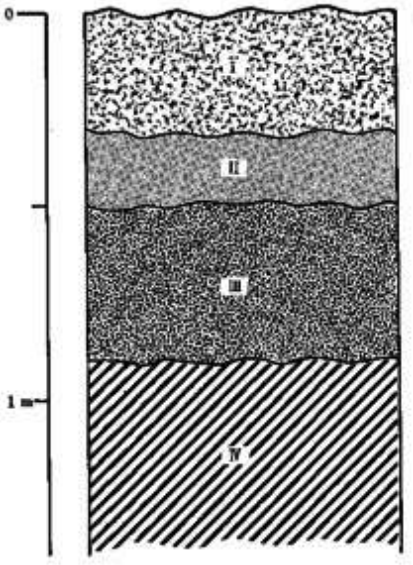
No.	佐分No.	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
					縄	弥	古	奈	平	中	
1		若宮遺跡Ⅱ	長土呂字若宮	微高地					○		本調査
2	7-3	若宮遺跡Ⅰ	長土呂字若宮	〃			○	○	○		昭和58年度調査
3	7	開防畑遺跡群	長土呂字開防畑・上北原他	台地	○	○	○	○	○		
4	7-1	開防畑Ａ遺跡	長土呂字南下北原	微高地				○	○		昭和54年度調査
5	7-2	開防畑Ｂ遺跡	長土呂字大豆田・下仲田他	〃		○	○	○	○		昭和55年度調査
6	6	近津遺跡群	長土呂字本宮・北近津他	台地		○	○	○	○		
7	6-1	北近津遺跡	長土呂字北近津	〃		○	○				
8	29	西近津遺跡群	長土呂字西近津・下大豆塚他	微高地	○	○	○	○	○		
9	29-1	西近津遺跡	長土呂字西近津	〃		○	○				昭和46年度調査
10		森下遺跡	長土呂字森下・若宮他	〃			○	○	○		昭和63年度調査
11	30	鷲林城址	常田字鷲林	〃						○	
12	8	芝宮遺跡群	長土呂字北上中原・北中中原他	台地	○	○	○	○	○		
13	8-1	芝宮遺跡第一次	長土呂字北下中原	〃	○	○	○	○	○		昭和54年度調査
14	8-2	芝宮遺跡第二次	長土呂字北中中原	〃	○	○	○	○	○		昭和55年度調査
15	8-3	芝宮遺跡第三次	長土呂字北中中原	〃	○	○	○	○	○		昭和57年度調査
16	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂屋し・原石他	〃		○	○	○	○	○	
17		聖原遺跡	長土呂字上聖端・新城他	〃			○	○	○		平成1・2・3年度調査
18	40	長土呂館跡	長土呂字城	〃						○	
19	541	曽根新城跡	岩村田字下穴虫	〃						○	
20	45	新城遺跡	岩村田字新城	低地		○	○	○	○		
21	38	下鹿沢遺跡	長土呂字下鹿沢・中鹿沢	〃		○	○	○	○		
22	41	枇杷坂遺跡群	岩村田字枇杷坂・久保田頭他	台地		○	○	○	○		
23	41-1	枇杷坂遺跡	岩村田字枇杷坂	〃				○	○		昭和60年度調査
24		上道路遺跡	岩村田字上道路	〃		○					昭和60年度調査
25	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後・六供他	〃		○	○	○	○	○	
26	52-1	六供後遺跡	岩村田字六供後	〃		○				○	昭和55年度調査
27	51-2	石巻城跡	岩村田字石巻他	〃		○	○	○	○	○	
28	51-1	主城跡	岩村田字古城	〃		○	○	○	○	○	昭和54年度一部調査
29	51-3	黒岩城跡	岩村田字古城	〃		○	○	○	○	○	昭和55・59年度調査
30	39	円正坊遺跡群	岩村田字円正坊・田中他	微高地	○	○	○	○	○		昭和59年度一部調査
31	39-1	清水田遺跡	岩村田字清水田	〃		○	○				昭和53年度調査
32	28	常田居屋敷遺跡群	常田字家地頭、塚原字長塚他	〃		○	○	○	○		
33	37	鷲林古墳群	長土呂字鷲林	〃			○				
34	35	下大豆塚古墳群	長土呂字下大豆塚	〃			○				昭和56年度調査
35	36	東漁下古墳群	常田字東漁下	〃			○				昭和49年度調査
36	34	大豆塚古墳群	塚原字大豆塚	〃			○				

２基・土壙墓17基、奈良時代の住居址18棟、平安時代の住居址18棟が検出されている。また、本遺跡の西側に隣接する若宮遺跡Ⅰは、昭和58年度に発掘調査が行われ、古墳時代後期の住居址２棟、奈良時代の住居址11棟、平安時代の住居址３棟が検出されている。さらに、本遺跡群の周辺には、岩村田遺跡群・長土呂遺跡群・芝宮遺跡群・西近津遺跡群・近津遺跡群などが展開しており、佐久市でも有数な遺跡群が密集している地域である。

第Ⅲ章　基本層序

若宮遺跡Ⅱは、佐久市の最西北端部に位置する。標高は713m前後を測り、南西に向かって緩やかに傾斜する。東方に濁川、西方に湧玉川が南流し、この両河川の周辺は田切り地形が帯状に形成され、この台地上には、近津遺跡群・周防畑遺跡群・芝宮遺跡群・長土呂遺跡群等の大遺跡群が展開している。

本遺跡は、周防畑遺跡群の南に位置し、田切り地形の終末部分にあたるものと考えられる。また、昭和63年度に本遺跡の西方約150mに位置する森下遺跡の調査を行った結果、調査区の東側に沿った形で小田切りが存在していることが明らかになった。以上のことから、若宮遺跡周辺の旧状は、若宮遺跡Ⅰで述べられているように、田切り地形の末端部分にあたる台地の縁辺部またはそれに近い位置にあったものと考えられる。



第Ⅰ層　黒褐色土層（10YR 2／3）
耕作土

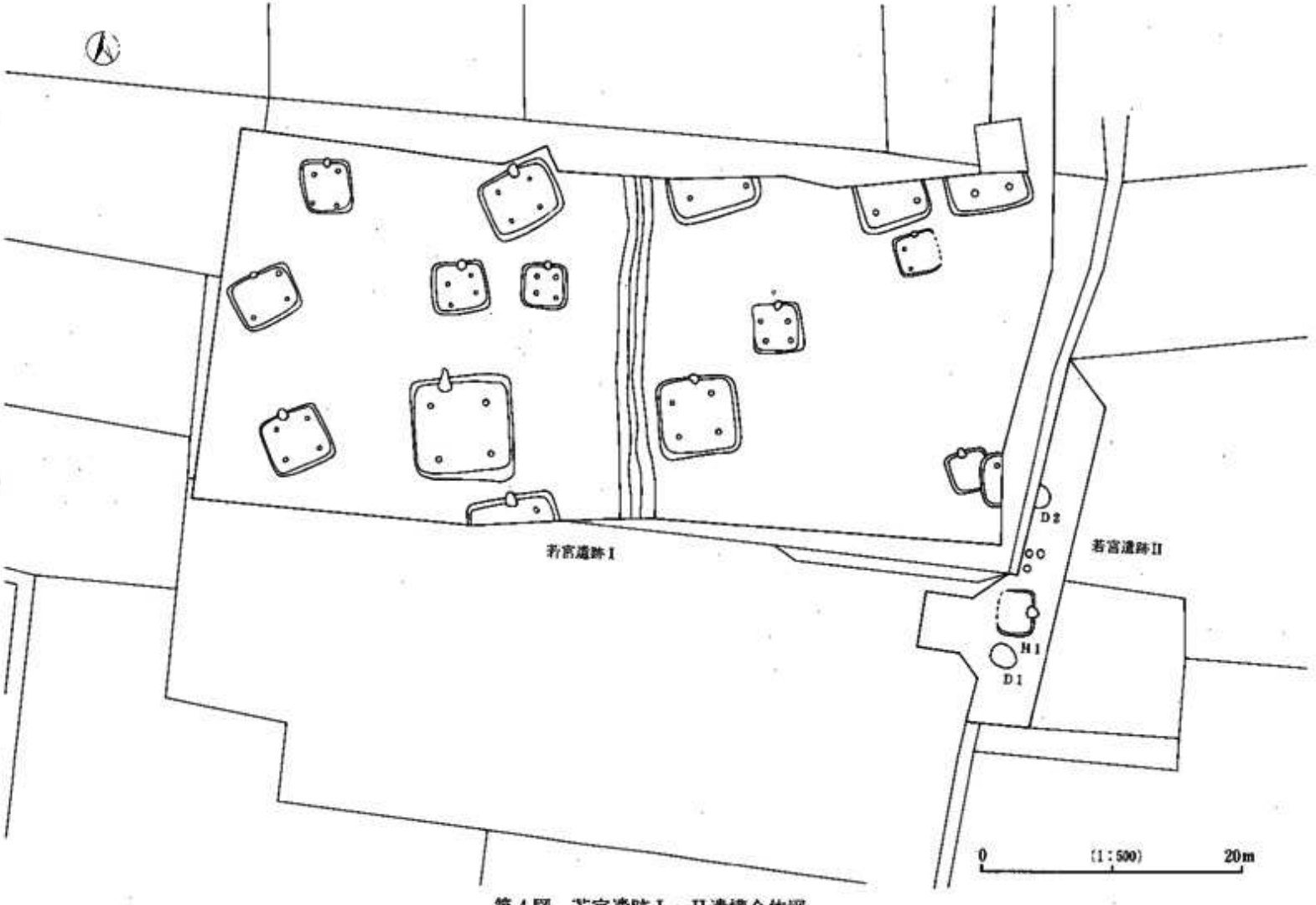
第Ⅱ層　暗褐色土層（10YR 3／3）
砂層

第Ⅲ層　黒色土層（10YR 2／1）
粒子細かく、粘性有り。

第Ⅳ層　明黄褐色土層（10YR 7／6）
明黄褐色ローム層

第３図　基本層序模式図

第Ⅰ層耕作土は、30～40cmを測り、厚さは全体にほぼ均一である。第Ⅱ層は10～30cmを測り、南に向かうほど厚く堆積する傾向が認められる。当遺跡の遺構確認面である。第Ⅲ層は40～60cmを測り、第Ⅱ層と同様に南に向かうほど厚く堆積する。今回検出された遺構の構築は、住居址は第Ⅱ層中において行われ、土坑は第１号土坑・第２号土坑とも第Ⅳ層まで達する。



第4図　若宮遺跡Ⅰ・Ⅱ遺構全体図

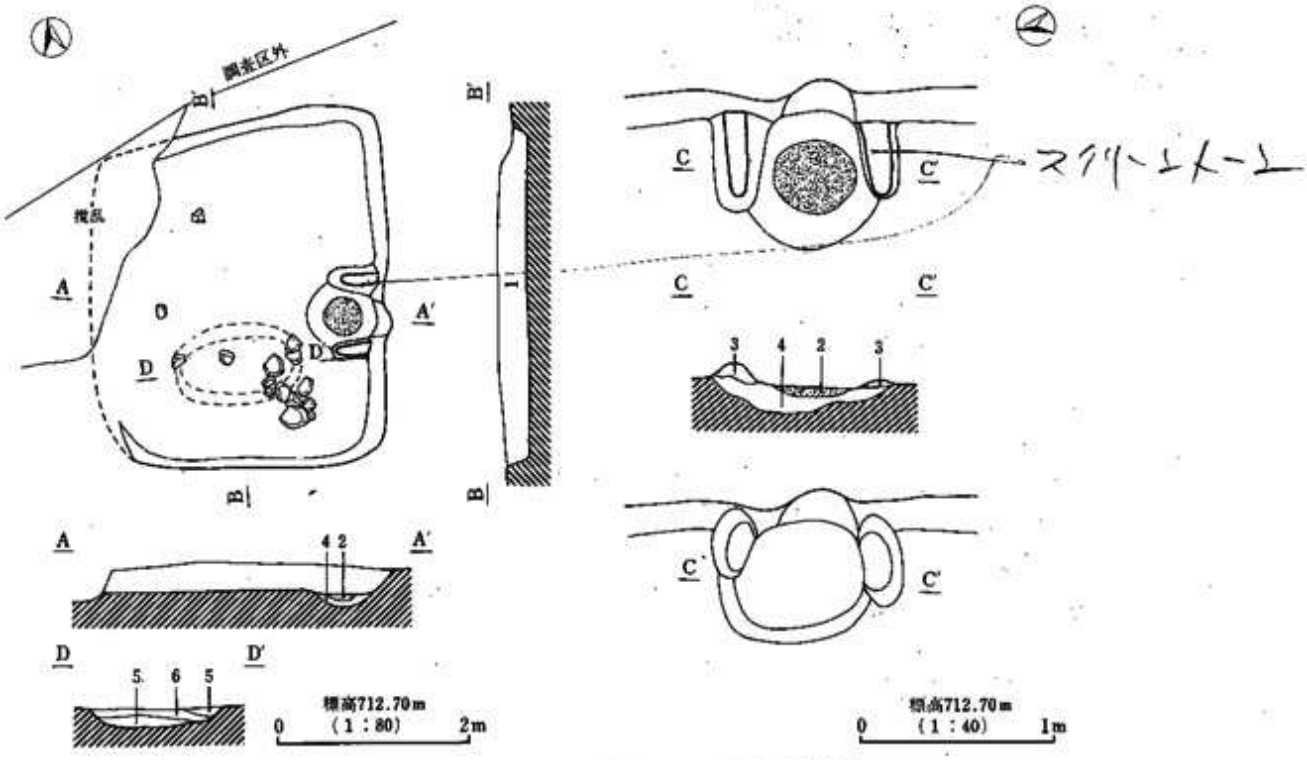
第IV章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

１）第１号住居址

遺構（第５図、図版三・四）

本住居址は、調査区中央付近に位置し、全体層序第II層上より検出された。他遺構との重複関係はないものの、耕作及び攪乱により西壁はすでに失われており検出されなかった。



1　黒褐色土層(10YR2/3)　φ1cm以下の小石を多量含む。パミス少量含む。砂質土層。
2　赤褐色土層(5YR4/6)　焼土層。
3　黒褐色土層(10YR2/2)　カマド構築粘土層。
4　暗褐色土層(10YR3/3)　黒色土（10YR2/1）をブロック状に少量含む。砂質土層。
5　黒褐色土層(10YR3/1)　灰を含み、粒子細かい。
6　黒褐色土層(10YR3/2)　砂質土層。

第５図　第１号住居址実測図

平面形態及び規模は、東壁長328cm、南壁長216cmを測り、南北に長い隅丸長方形を呈する。カマドを主軸とする主軸方位はN－100°－Eを示す。

覆土は、径1cm以下の小石を多量に含む黒褐色砂質土層一層からなる。

確認面からの壁高は、0～35cmを測る。壁体は、全体層序第II層砂層を利用して構築されており、もろい。壁溝は検出されなかった。

床面は全体層序第II層砂層上に、黒褐色粘土を含む黒褐色土を薄く埋め戻して構築され、中央付近にわずかに堅固な部分が認められるものの、全体的には堅固な状態とは言い難い。

ピットは検出されなかったが、中央部南側の床面下より土坑が検出された。120cm×84cmの楕円形を呈し、深さは24cmを測る。覆土は灰を含み、粒子の細かい黒褐色土層（第5層）と黒褐色砂質土層（第6層）の二層に分割された。土坑底面は、全体層序第III層黒色土層に達する。

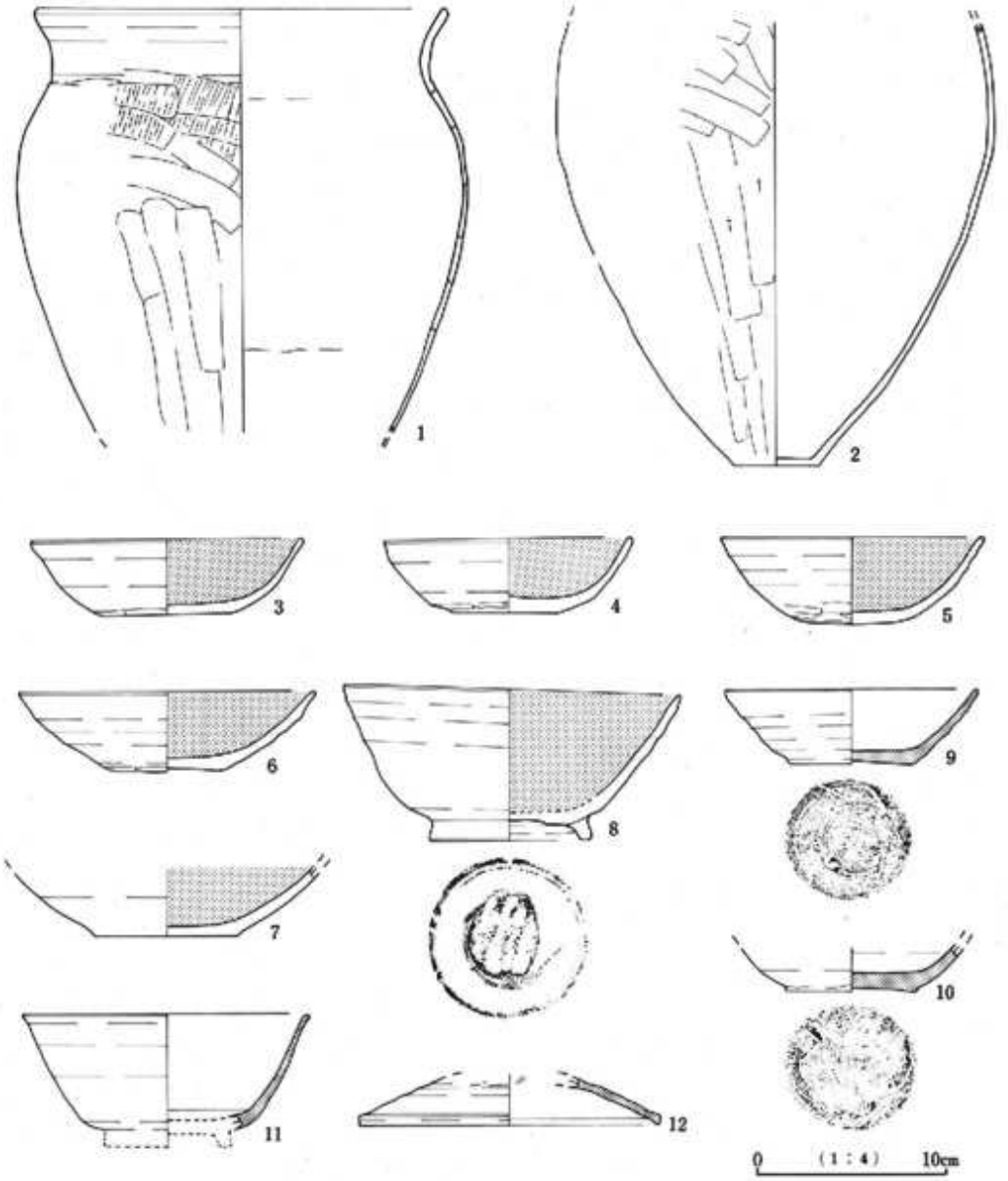
カマドは、東壁中央南寄りに位置するが、天井部はすでに失われている。焚口から煙道部までの長さ70cm、袖部の幅96cmの規模を有する。煙道部は壁体をわずかに掘り込んで設けられ、火床部は、煙道下の床面を78cm×62cmの楕円形に掘り込んだ後、第4層暗褐色砂質土層を埋め戻して構築され、焼土の堆積が約6cm見られる。火床部の掘り込みは14cmの深さを有し、全体層序第III層黒色土層まで達している。袖部は第3層黒褐色粘土層によって形成される。また、カマド付近の床面上より、軽石を主体とする礫がまとまって出土した。これらの中には、火熱のため赤く焼けているものも認められることから、カマドの構築材として用いられた礫と考えられる。

遺物の出土状況は、特に集中する箇所は認められず、覆土中に散在した状況で出土した。6－1・2・4・7はカマドからの出土である。

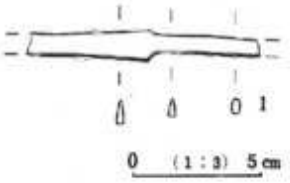
遺物（第6・7図、図版五・六）

本住居址からは、土師器・須恵器・鉄製品が出土している。土師器の器種には甕・坏・椀があり、須恵器には坏・蓋がある。そのうち土師器8点、須恵器4点、鉄製品1点を図示した。

6－1・2は、所謂「武蔵甕」で、胴部中位で軽くふくらみ最大径を有する。調整は胴上位に斜位のヘラミガキ、下位に縦位のヘラミガキが施される。6－1は「コ」の字状の口辺部を有する。この他、小片のため図示し得なかったが、ロクロ成形による甕の胴部片が出土している。土師器坏には6－3～7の5点があり、内面に黒色処理が施される。体部はいずれも内湾気味に開くが、6－6・7は器高が低く、体部が大きく開く形態を持つものである。成形はロクロ成形によるものであるが、底部の調整は回転糸切りの後、底部及びその周縁部にヘラケズリを施すもの（6－4・5・6）と底部全面にヘラケズリを施すもの（6－3・7）とがある。6－8はロクロ成形による高台付きの椀で、内面は黒色処理され、底部は高台貼り付けの後、指によるナデがみられる。6－9・10は須恵器坏で、ロクロからの切り離しはいずれも糸切りであり、未調整である。6－11は底部を欠損しているが、高台を有する坏であり、外面に自然釉が見られる。須恵



第6図　第1号住居址出土土器実測図



第7図　第1号住居址出土
鉄製品実測図

第２表　第１号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
6－1	土師器甕	(21.6) 〈22.3〉 －	口辺部「コ」の字状を呈する。 胴部は上位で緩く膨らみ、最大径を有する（23.8cm）。	内）口辺部ヨコナデ。 胴部ナデ。 外）口辺部ヨコナデ。 胴部縦位のヘラケズリの後、上半部縦位・斜位のヘラケズリ。	回転実測、口縁部１／３残存。 胎土　白色粒子わずかに含む。 色調　2.5YR4／4 （にぶい赤褐色）
6－2	土師器甕	－ 〈23.3〉 (4.6)	胴中位で緩く膨らみ、丸味を持つ。	内）胴部ナデ。 外）上半部縦位・斜位のヘラケズリ。 下半部縦位のヘラケズリ。	回転実測。 胎土　白色粒子少量含む。 色調　7.5YR3／4 （暗褐色）
6－3	土師器坏	14.2 4.0 6.7	体部内湾気味に開く。	内）黒色処理。 外）ロクロヨコナデ、 底部・底部周縁手持ちヘラケズリ。	完全実測。 胎土　白色粒子わずかに含む。 色調　7.5YR5／6 （明褐色）
6－4	土師器坏	12.8 4.0 5.5	体部内湾気味に開く。 底部回転糸切り。	内）黒色処理。 外）ロクロヨコナデ、 底部・底部周縁手持ちヘラケズリ。	完全実測。 胎土　白色粒子わずかに含む。 色調　7.5YR4／6 （褐色）
6－5	土師器坏	(13.6) 〈4.7〉	体部は内湾気味に開き、底部は偏平な丸底を呈する。 底部回転糸切り。	内）黒色処理。 外）ロクロヨコナデ、 底部・底部周縁手持ちヘラケズリ。	回転実測、口縁部１／４残存。 胎土　白色粒子わずかに含む。 色調　7.5YR5／4 （にぶい褐色）
6－6	土師器坏	(15.4) 4.2 (5.6)	体部内湾気味に開く。 底部回転糸切り。	内）黒色処理。 外）ロクロヨコナデ、 底部・底部周縁手持ちヘラケズリ。	回転実測。 胎土　微石英粒少量含む。 色調　5YR5／8 （明赤褐色）
6－7	土師器坏	－ 〈3.3〉 (7.7)		内）黒色処理。 外）ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ。	回転実測。 胎土　白色粒子少量含む。 色調　5YR5／6 （明赤褐色）
6－8	土師器高台付椀	17.5 8.4 8.4	体部ほぼ直線的に開く。 高台は逆台形状を呈し、高台貼り付けの後、底部指ナデ。	内）黒色処理、剥離著しい。 外）ロクロヨコナデ。	完全実測。 胎土　白色粒子少量含む。 色調　7.5YR5／4 （にぶい褐色）
6－9	須恵器坏	13.2 4.0 6.5	体部直線的に開く。 底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ。	完全実測。 胎土　白色粒子・砂粒含む。 色調　7.5YR6／1 （灰色）
6－10	須恵器坏	－ 〈2.3〉 (6.8)	底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ。	回転実測。 胎土　白色粒子少量含む。 色調　10YR7／4 （にぶい黄橙色）
6－11	須恵器高台付坏	(15.0) 〈6.1〉 －	体部直線的に開き、端部でわずかに外反する。	内外面　ロクロヨコナデ。	回転実測。 胎土　白色粒子含む。 色調　2.5Y5／1 （黄灰色）
6－12	須恵器蓋	〈2.6〉 (15.6)	天井部は直線的に開き、端部で屈曲して直立する。	内）ロクロヨコナデ。 外）上半部ヘラケズリ。 下半部ロクロヨコナデ。	回転実測、口縁部１／４残存。 胎土　白色粒子含む。 色調　7.5Y5／1 （灰色）

器の蓋には６－12がある。つまみ部は欠損し天井部のみで、上半にはヘラケズリが施される。また、小片のため図示し得なかったが、内面に黒色処理を施された土師器蓋のつまみ部が出土している。

鉄製品には刀子（７－１）がある。刃部と茎部の先端を欠損しており、刃部残存長4.8cm、茎部残存長4.2cmを測り、刃関・背関を有する。

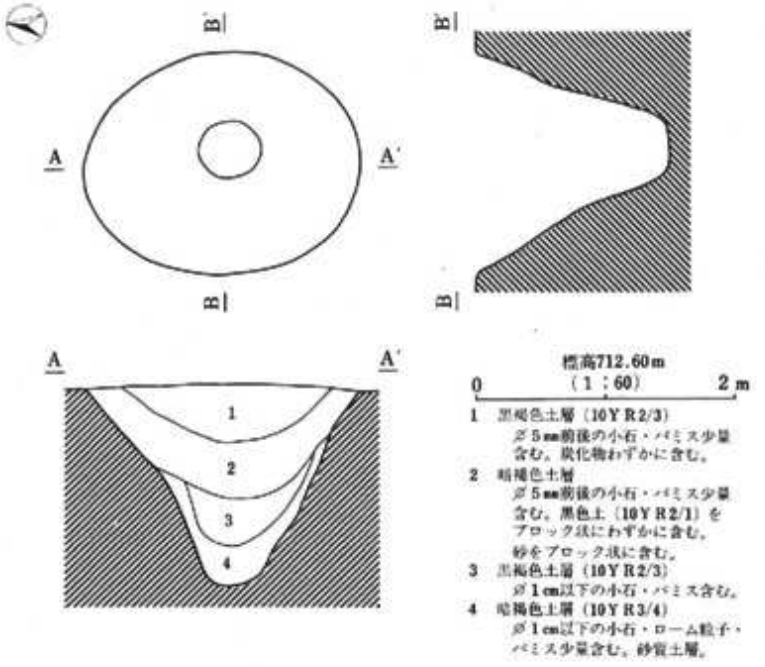
以上の出土遺物から、本住居址の所産期は平安時代前葉と考えられる。

第2節　土　坑

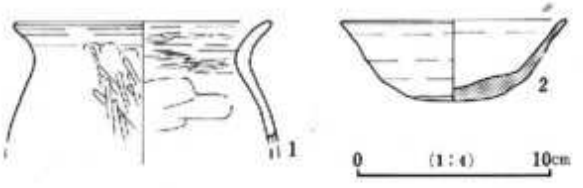
1）第1号土坑（第8・9・10図、図版四・五）

第1号土坑は調査区南側に位置し、全体層序第II層上面より検出された。

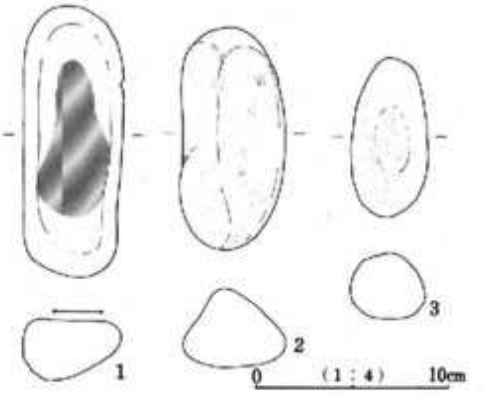
平面形態及び規模は長軸284cm、短軸228cmを測る楕円形を呈し、長軸方位はN－6°－Wを示す。深さは158cmを測り、底面は全体層序第IV層黄褐色ローム層まで達している。覆土は四層に分割された。第1層は径5mm前後の小石・パミスを少量含み、炭化物をわずかに含む黒褐色土層、第2層は径5mm前後の小石・パミスを少量含み、砂・黒色土をブロック状に含む暗褐色土層、第3層は黒褐色土層で径1cm以下の小石・パミスを含む。第4層は暗褐色土層で径1cm以下の小石・パミス、ローム粒子を少量含む砂質土層である。



第8図　第1号土坑実測図



第9図　第1号土坑出土土器実測図



第10図　第1号土坑出土石器実測図

本土坑からは土師器・須恵器・石器が出土してい

第3表　第1号土坑出土土器観察表

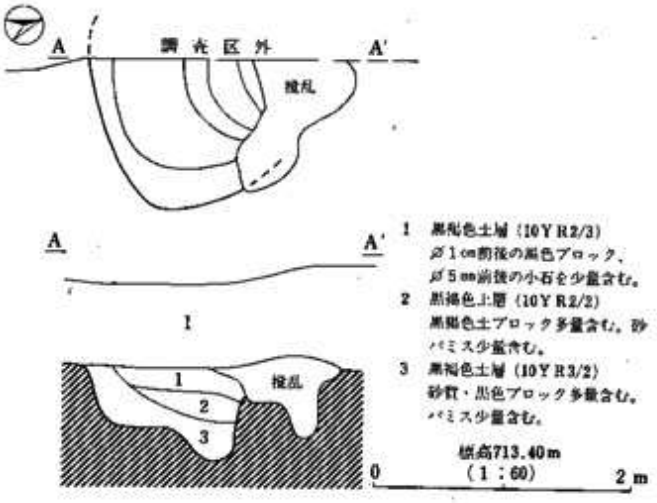
挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
9－1	土師器甕	(13.0) 〈6.2〉 —	最大径は胴部にあり、口辺部は短く外反する。	内）口辺部ヨコナデの後、ヘラミガキ。 胴部ナデ。 外）口辺部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリの後、ヘラミガキ。	回転実測、口縁部1／4残存。 胎土　白色粒子わずかに含む。 色調　7.5YR5／4 （にぶい褐色）
9－2	須恵器坏	(11.4) 4.2 (5.0)	丸底気味の底部から、体部は直線的に外傾する。	内）ロクロヨコナデ。 外）ロクロヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ。	回転実測、口縁部1／8残存。 胎土　白色粒子少量含む。 色調　7.5YR2／3 （黒褐色）

る。土師器の器種には甕・坏があり、須恵器には甕・坏・蓋がある。そのうち図示できたのは土師器1点、須恵器1点、石器3点である。

9－1は土師器甕で、最大径を胴部に有し、口辺部は短く外反する。調整は口辺部にヨコナデ、胴部にヘラケズリの後、ヘラミガキが施される。9－2はロクロ成形による須恵器坏で、体部はほぼ直線的に外傾し、底部には手持ちヘラケズリが施される。石器には10－1～3があり、10－1は安山岩製の磨石で、表面に擦過痕が見られる。10－2は花崗岩製、10－3は軽石製で編物石と思われる。この他、土師器甕・坏、須恵器甕・坏・蓋があるが、いずれも小片で本址の時期決定の資料とはなり得ず、性格及び時期は不明である。

2）第2号土坑（第11図、図版四）

第2号土坑は調査区北側に位置し、全体層序第II層上面より検出された。西半部は調査区外にあり、さらに、北側を撹乱により破壊されているため平面形態及び規模は不明であるが、南北長220～230cmを測る円形または楕円形を呈するものと考えられる。底面は南側にテラスを有し、北側で一段深くなり、全体層序第IV層黄褐色ローム層に達する。確認面からの深さはテラス部で45cm、最深部で72cmを測る。覆土は三層に分割された。第1層は径1cm前後の黒色土ブロック・径5mm前後の小石を少量含む黒褐色土層、第2層は黒色土ブロックを多量に含み、砂粒を少量含む黒褐色土層、第3層は黒色土ブロック・砂粒を多量に含む黒褐色土層である。



第11図　第2号土坑実測図

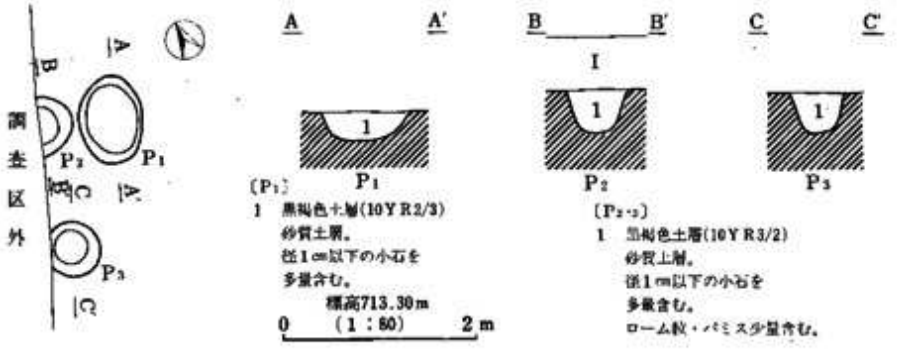
本土坑からの出土遺物は皆無であり、性格・時期については不明である。

第３節　ピット群（第12図）

本遺跡からは、調査区中央付近よりピットが３個検出され、これをピット群とした。いずれも全体層序第Ⅱ層上面より検出され、底面は全体層序第Ⅳ層黄褐色ローム層に達する。

P1は90cm×66cmの南北に長い楕円形を呈し、深さは47cmを測る。覆土は径１cm以下の小石を含む黒褐色砂質土層一層からなる。P2は西半部が調査区外のため未調査であるが、径64cmの円形を呈するものと考えられ、深さは50cmを測る。P3は径58cmの円形を呈し、42cmの深さを有する。P2・P3は平面形態及び規模が近似し、また、いずれも覆土が黒褐色砂質土層一層からなることから、何らかの関係を有するものと考えらえる。

出土遺物は、P1・P2より土師器甕・坏があるが、いずれも細片であり、時期・性格とも不明である。



第12図　ピット群実測図

第Ⅴ章　調査のまとめ

今回若宮遺跡Ⅱにおいて検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は竪穴住居址１棟、土坑２基、ピット等である。一方、出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・鉄製品・石器などである。

今回行った調査は進入路新設に伴うもので、調査面積が138㎡と極めて小範囲での調査であるため、昭和58年度に発掘調査の行われた、本遺跡の西側に隣接する若宮遺跡Ⅰと本遺跡の西方約150mに位置し、昭和63年度に調査の行われた森下遺跡を含めてまとめを行いたい。

若宮遺跡Ⅰで検出された遺構は、竪穴住居址16棟、溝状遺構１基であり、竪穴住居址の所産期は古墳時代後期２棟、奈良時代11棟、平安時代３棟の三時期に大別される。森下遺跡で検出された遺構は、竪穴住居址20棟、特殊遺構３基、土坑29基、溝状遺構６基であり、弥生時代後期前半４棟、古墳時代後期４棟、古墳時代終末から奈良時代初頭１棟、奈良時代２棟、奈良時代終末から平安時代初頭２棟、平安時代前葉４棟、時期不明３棟である。これらの住居址を概観すると、弥生時代の住居址は森下遺跡から検出されたのみで、さらにその分布は標高710m以下の地域に限られ、標高712～714mを測る若宮遺跡Ⅰ・Ⅱからは検出されていない。また、本遺跡の南方に位置し、標高702～704mを測る周防畑Ｂ遺跡からは23棟の弥生時代の住居址が検出されているのに対し、北方の標高710mを越える遺跡では西近津遺跡から後期の住居址が１棟検出されたのみである。これらをまとめると、湯川・濁川流域における弥生時代住居址の分布は、標高710m前後を境として展開すると考えられる。

古墳時代後期の住居址は周防畑Ｂ遺跡では検出されていないものの、森下遺跡・若宮遺跡Ⅰで６棟検出されており、さらに標高730m前後の聖原遺跡、770m前後の前田遺跡群・鋳師屋遺跡群においても検出されていることからかなり広範囲にわたって分布しているものと推察される。

奈良時代及び平安時代の住居址は、南端の周防畑Ｂ遺跡で67棟、森下遺跡で８棟、若宮遺跡Ⅰ・Ⅱで15棟が検出され、聖原遺跡、前田遺跡群、鋳師屋遺跡群をはじめとする発掘調査においても該期の集落址が確認されていることから、本遺跡周辺に見られる台地上のほぼ全域にわたって相当数の集落が存在すると推測される。

引用参考文献

佐久市教育委員会　1971　『佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報』

1980　『周防畑遺跡』

1980　『周防畑Ｂ遺跡調査概報』

1984　『若宮遺跡』

1985　『鋳師屋遺跡』

1988　『鋳師屋遺跡Ⅱ』

1988　『下芝宮遺跡』

1989　『下芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲ』

1989　『前田遺跡』

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター　1986　『芝間』

1989　『森下』

御代田町教育委員会　1987　『前田遺跡』

小諸市教育委員会　1988　『鋳物師屋』

若宮遺跡II付近航空写真（東洋航空事業株式会社撮影C5-8）

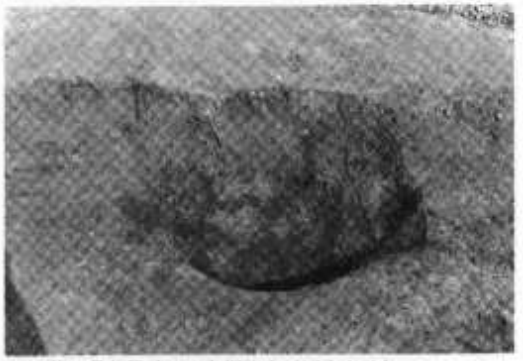
1．若宮遺跡Ⅱ　全景（北方より）

2．若宮遺跡Ⅱ　全景（南方より）

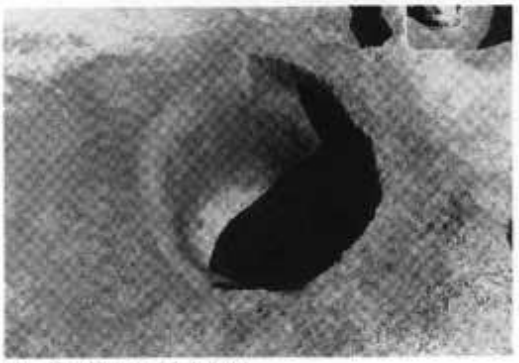
1．第1号住居址（西方より）

2．第1号住居址（西方より）

1．第1号住居址カマド（西方より）

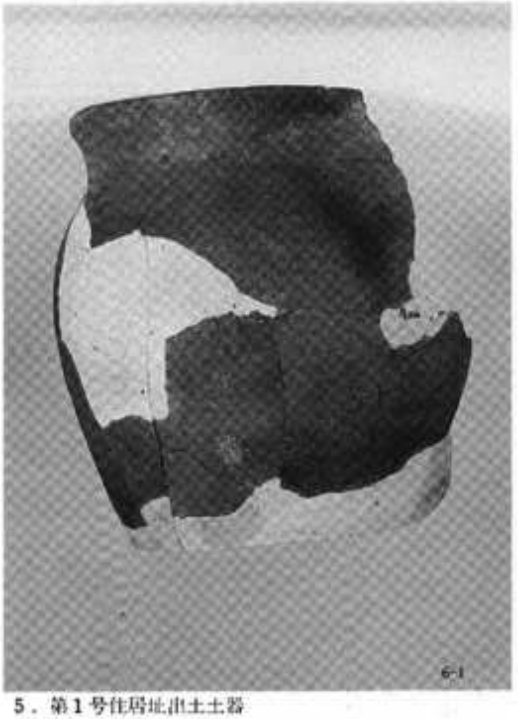


2．第1号住居址カマド掘り方（西方より）



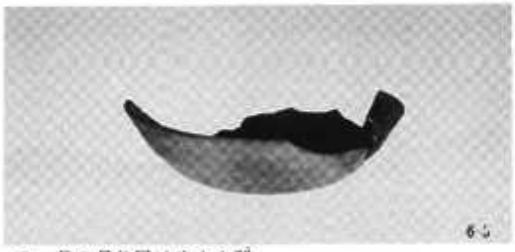
3．第1号土坑（南方より）

4．第2号土坑（南方より）



5．第1号住居址出土土器

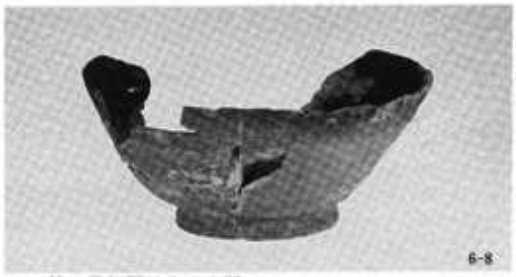
6．第1号住居址出土土器



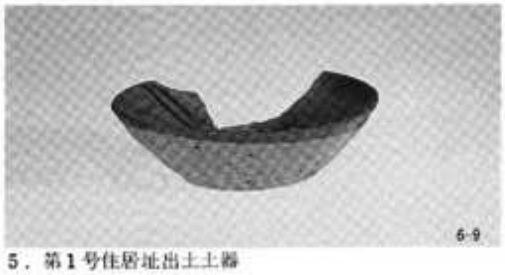
1．第1号住居址出土土器

2．第1号住居址出土土器

3．第1号住居址出土土器



4．第1号住居址出土土器



5．第1号住居址出土土器

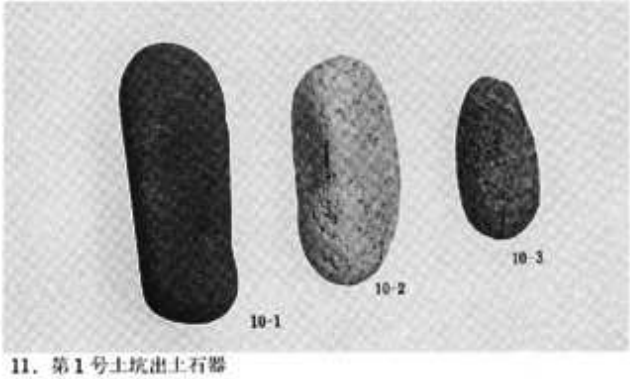
6．第1号住居址出土土器

7．第1号住居址出土土器

8．第1号土坑出土土器

9．第1号住居址出土鉄製品

10．第1号住居址出土鉄製品X線写真



11．第1号土坑出土石器

佐久市埋蔵文化財調査報告書第１集　『金井城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書第２集　『市内遺跡発掘調査報告書1990』
佐久市埋蔵文化財調査報告書第３集　『石附窯址群Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書第４集　『大ふけ遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書第５集　『立科Ｆ遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書第６集　『上曽根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書第７集　『三貫畑遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書第８集　『瀧の下遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書第９集　『国道141号線関係遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書第10集　『殿原遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書第11集　『赤座坂外遺跡』

長野県佐久市
佐久市埋蔵文化財調査報告書第12集
周防畑遺跡群
若宮遺跡Ⅱ発掘調査報告書
1992年３月
編集・発行　佐久市教育委員会
印刷所　信毎書籍印刷株式会社